

ビルマ戦線簡単史

多くの日本兵が亡くなっているのに、失礼とは思いますが、若い方々にビルマ戦線を、知って貰いたくビルマ戦線簡単史を記載しました。

ビルマ進攻作戦は、日本にとって南方資源地帯の西側防壁であり、ラングーン～ラシオ～昆明と援蒋（蒋介石軍）ルートの拠点であり、他方英国にとってビルマ失陥は、インド中近東への脅威であった。

南方総軍（威）は、総司令官 寺内 寿一 大将 を柱に、

ビルマ方面軍（森）は、司令官 河辺 正三 中将 （昭和18年3月に新設）

方面軍直轄部隊は、第24旅団（巖）、第72旅団（貫徹）、第105旅団（敢威^{かんい}）

第53師団（安＝京都）、第49師団（狼）

第15軍（林）は、第15師団（祭＝敦賀）、第31師団（烈＝甲府）、第33師団

（弓＝宇都宮）

第28軍（策）は、第2師団（勇）、第54師団（^{つわもの}兵＝岡山）第55師団（壮＝四国善通寺）

第33軍（昆）は、第18師団（菊＝久留米）、第56師団（龍＝九州）を従えていた。

（ ）内は通称と編成地、

- ・師団→ 旅団→ 連隊（聯隊）→中隊→ 小隊
- ・元帥→大将→中将→少将→大佐→中佐→少佐→大尉→中尉→少尉→准尉
曹長→軍曹→伍長→上等兵→一等兵→二等兵

通常部隊編成の場合は、おおよそ以下の構成で、一概にまとめることが出来ませんので一つの目安として下さい。

1師団（2万人位）は、2旅団（各1万人位）からなり

1旅団（1万人位）は、4個連隊（各3千人位）

1連隊（3千人位）で、4個中隊（各6百人位）からなる

1中隊（6百人位）で4個小隊（各小隊は150人位）

1小隊（125～150名位）

戦時編成になりますと、かなり違ってきますので、おおまかな軍隊組織図と雑ばくな人員数字として押さえて下さい。

昭和17年2月17日第15軍は進攻作戦を開始し3月8日には首都ラングーンを占領

昭和17年5月18日各所を占領しビルマ方面主要作戦の終了

南東方面の情勢悪化により、ビルマ方面への反抗が予想され、第15軍では手薄のため、昭和18年3月に、ビルマ方面軍が新設。

連合軍はカサブランカ会談で昭和18年11月からビルマへ本格的進攻を開始、米式装備の支那軍は、雲南とレドの2方向から、英印軍はカレワからの地上進攻と、南西海岸の戦略拠点であるアキャブ奪回作戦を開始。昭和18年末から、航空機や戦車や輸送力に勝る、英印軍に対し劣勢となり昭和19年に入ると、苦戦を強いられ転進（退却）を余儀なくされた。有名なインパール作戦だけでなく、物資の補給がなく、食べる物も自分で調達しなければならず、飢餓、マラリア、敵弾、雨季の雨に翻弄され、多くの屍が転々とする白骨街道を作り出した。

昭和20年4月23日木村方面軍司令官はビルマ政府や日本大使館、居留民になんらの処置をとらず、ラングーンを脱出、大混乱の中5月3日英軍により首都は奪還された。敵中に残された各軍は、多数の死傷者を出しながら、敵中を潜行、突破して7月下旬シッタン河東岸に兵力を展開し防戦中に終戦を迎えた。

他方、南機関は、大本営と陸軍中野学校出身者が中心となり結成された組織で、任務は、当時日本と戦争状態にあった支那軍に欧米が軍事物資を送り続けている通称「ビルマ・ルート」の遮断と、英国の支配下にあるビルマで、独立運動を起こすための諜報活動を行うことでした。英官憲の厳重な監視をくぐりラングーンの南バーセン港から、オンサンと同志4人が日本領事館の協力で合流し、ラングーン港を泳いで渡り、春天丸に乗り込み、ビルマを脱出。

後に春天丸は昭和19年11月17日に敵潜水艦の雷撃により沈没、ビルマを脱出した三十人の志士達を中心に独立義勇軍は日本軍のもとで軍事訓練を受け、日本の対英開戦後はともにビルマに侵攻して英国軍を駆逐し、昭和18年8月には大日本帝国承認のもとで独立を達成、さらに後には日本軍と、日本降伏後は再度英国軍と交戦し真の独立を勝ち取ります。戦後南機関に携わった日本人7名はビルマ国から最高勲章の「オン・サン徽章」が贈られました。今日でも国軍記念日のパレードでは「軍艦行進曲」や「愛馬行進曲」をはじめとする日本の軍歌が演奏されるということです。

ビルマ戦線で戦った連隊の一部を紹介

【歩兵第151連隊（安10022部隊）編成地 津 上級部隊 第53師団】

昭和19年3月、インパール作戦の増援部隊として、ビルマ方面軍に編入
昭和19年5月11日、シッタン河を渡河してビルマ平原に進出。5月16日連隊本部はインパール作戦の兵站基地であるモールに到着。軍命令により第15軍の隷下に編入されイエウに集結。5月26日インパールに向けて進撃を開始。6月8日チドウィン河を渡河し、アラカン山脈を越え、チュラチャンプールに到着、第33師団の指揮下に入る。6月22日敵陣地を激戦のすえ占領するが26日には敵の猛反撃により奪取される。7月3日軍はインパール作戦を断念、撤退命令下る。連隊は第33師団の撤退掩護のためクワイモール附近の陣地占領を命じられる。7月11日撤退する師団を追尾する敵と間に激しい白兵戦が展開される。7月18日撤退掩護の任務を歩兵第215連隊と交代し、撤退を開始、原所属部隊の第53師団への復帰命令が下り、8月24日インドウに向け出発。ビルマ進攻時約1,600名の連隊主力は総員250名に減少、損害の半数は戦死、残り半数は病気と飢えによるものであった。その後、イラワジ会戦、シッタン作戦に参加、8月15日ミッチョニ三角地帯陣地で終戦を迎える。

【工兵第54連隊（^{つわもの}兵 10118部隊）編成地 岡山 上級部隊 第54師団】

昭和18年3月兵庫、岡山、鳥取の三県出身者で編成ビルマ方面に派遣された連隊は、道路、橋梁、鉄道の建設に従事するとともにアキャブ作戦に参加。しかし、インパール作戦の失敗とともに撤退を開始。イラワジ河、ペグー山系、シッタン河と続く撤退行で、渡河作業や道路建設に従事した。激烈な戦闘により913名中8割以上の尊い犠牲者をだした。

【第31師団衛生隊（烈10708部隊）】

仏印 タイ マレーを経て昭和18年8月16日ラングーンに上陸、ジュピー山系一帯に展開、印度侵攻（ウ号作戦：インパール作戦の秘匿名）の命令を昭和19年2月25日に受けチャンギー山麓を進発、各々その突進隊に所属し3月16日チンドウィン河を渡河、アラカン山系を突破し進撃4月6日敵砦コヒマを攻略、主攻インパールへの増援を企図する英軍とコヒマ附近で激戦、5月に入ると雨期が深まり弾薬糧秣の補給が全く途絶える。6月5日コヒマ撤退の命令下り、飢餓に悩む兵と傷病者後送の任務は重く犠牲者を重ねた、雨期の雨は山径をたちまち濁流にし、密林に仮眠している兵士の下を流れる。延々100キロウクルルにいたるも一握りの補給無し。泥濘は深く歩行を困難にし転倒し、更に河川は奔流となって進路を阻む、草を食べ泥水をすすり進むも、飢餓と悪疫に倒れる者相次ぎ屍は累々と横たわり休息の場所を探すのにも困難をきたした。動けなくなり自爆するもの、力つきて死んでいる者の死臭が満ち溢れていた。昭和19年8月10日シッタに集結、軍の撤退援護のため背水の陣を布く、砲爆撃を以て急迫する敵攻勢をよく支え8月30日チンドウィン河を渡河イエウを経てサガインに到着、昭和20年1月17日イラワジ河会戦並びにメージュテラの会戦に参加しビルマ中原に於いて命運を賭して奮戦3ヶ月余、敵を包囲して一挙に殲滅せんと企図するも空軍力、機動力の劣勢は戦勢を保持し得ずシャン高原に転進、5月30日ナチジャンに到着サルウィン河防衛作戦参加中終戦となる。

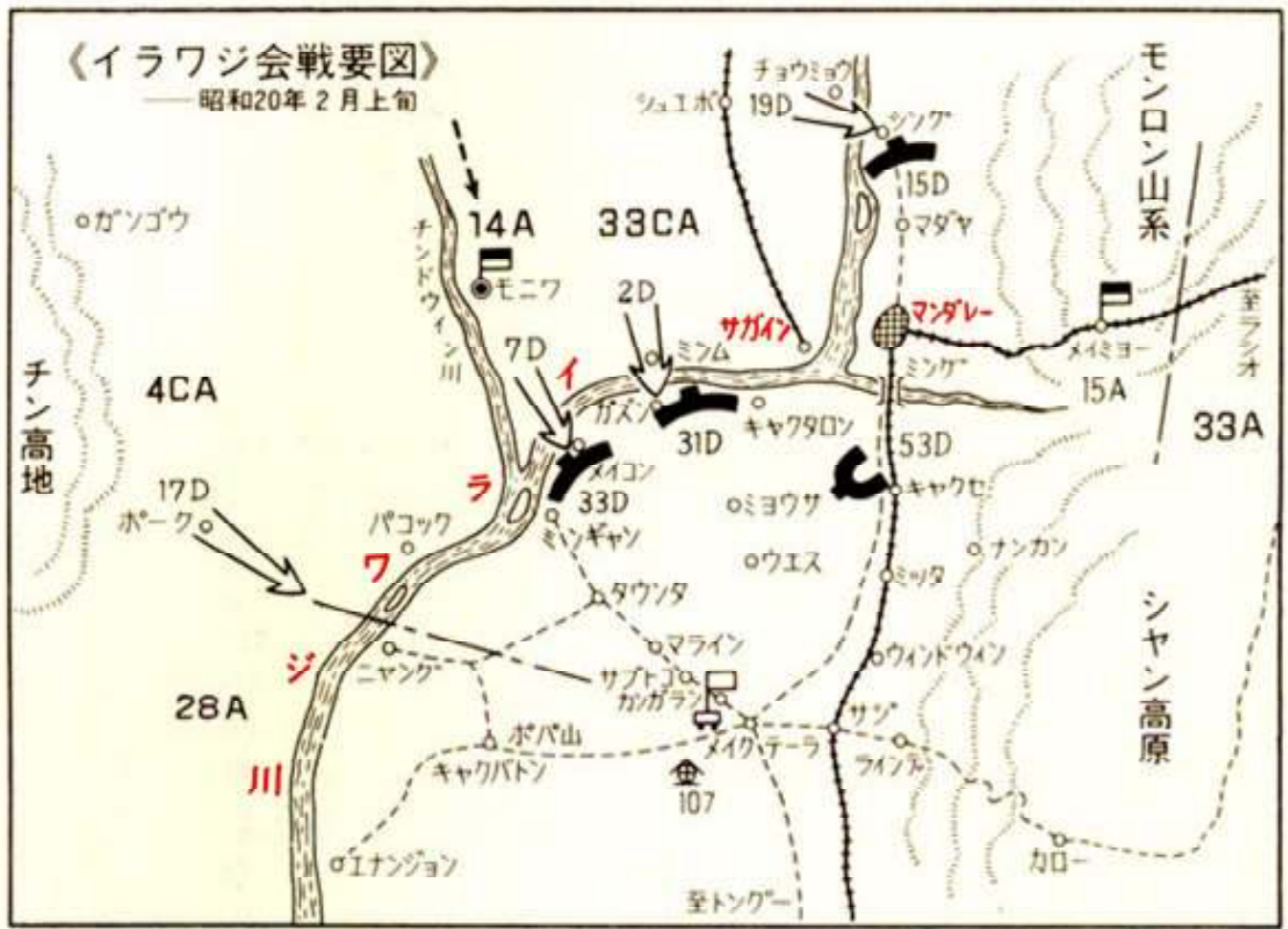
編成人員699名 戦死者159名 戦病死300名

ビルマ戦線投入された兵力328,498人の内 戦没者190,900人

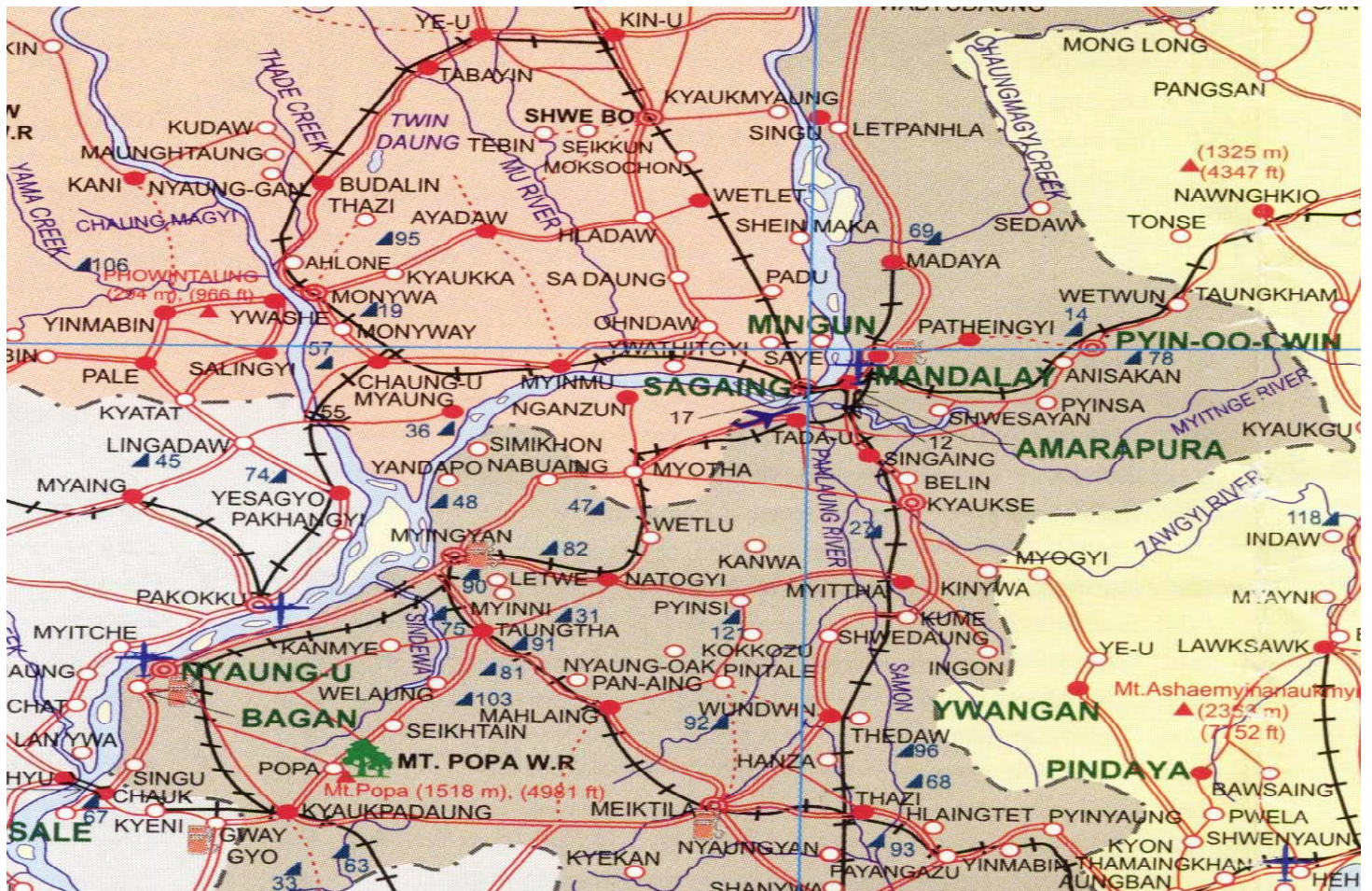
戦力格差は1：15 ビルマ（ミャンマー）の面積、日本の約1.8倍

お薦め書籍

- ・ビルマ最前線 ～白骨街道 生死の境～ 小田 敦巳 著
つわもの 兵 兵団 輜重隊（輸送隊）の二等兵戦場の実相です。
光人社NF（ノンフィクション）文庫 ￥657＋税
- ・烈 兵団 インパール戦記 ～陸軍特別挺身隊の死闘～ 斉藤 政治 著
光人社NF（ノンフィクション）文庫 ￥629＋税
- ・アーロン収容所 ～西欧ヒューマニズムの限界～ 会田 雄次 著
中公新書 ￥700＋税



31D=31師団「烈」、33D=33師団「弓」、15D=15師団「祭」、53D=53師団「安」



平成14年ミャンマー慰霊の旅With衆議院議員 西村眞悟でヤンゴンにて購入した地図